

🍷「ばらになったのぞみちゃん（日本語版）」再発行に寄せて

発行人 島田 秀郎

読者の皆様

昨年（2002年）発行した「ばらになったのぞみちゃん（英語版、2,000部発行済み）」をお読みいただき、皆様方から、「感動しました」、などの沢山の感想をお寄せいただきました。有難うございました。寄せられたお金は全額 UNHCR に寄付しました。

「この作品の日本語版はないのでしょうか?」、という声を数多く頂き、作品を印刷して下さった印刷屋さんにお尋ねしたところ、「探してみると日本語版もありました。」という報告を受けました。早速これを読んでみると、日本語でかかっているため、原作者のより強い思いが伝わって来る作品です。

今般、日本語版を発行、英語版の作品をお読み頂いた読者の方々を中心に再度作品をご紹介します。

この作品は、私が入院先の病院で知りあった、渡辺桂子さんの作品です（以下は昨年英語版を作成したときに書いた解説文の、改訂版です）。

1. 本作品との出会い

2018年冬、私は脳循環器系の疾患を患い、いのちは助かったものの、身体の左側に麻痺が残ってしまい、これからどうやって生きていこうかという、自分の人生の意味や生きる意欲を失っていました。丁度同じ頃、本作品の原作者渡辺桂子さんが入院してこられました。

夕食が終わったある日のこと、渡辺さんは、「ばらになったのぞみちゃん」、のお話をされ、その時に、「もうこれが最後の一冊になってしまいましたが、宜しければお読みいただけますか？私が作ったのですが。」と紹介を頂いたのが、「ばらになったのぞみちゃん（英語版）」でした。

作品はシンプルな英語で書かれ、挿絵は全て渡辺さんの手書きによるパステル調水彩画で、それはやさしげで、とても可愛い作品でした。主人公のぞみちゃんの姿も少し寂しげで、こころ惹きつけられました。



2. 渡辺さんのご逝去と「ばらになったのぞみちゃん（英語版）」の再発行

退院後、私は日常生活に戻りました。日々の生活と仕事に追われ、「ばらになったのぞみちゃん」のこともすっかり忘れていました。2022年春、桜が満開になる頃、渡辺さんは93歳の



天寿を全うされた、とご家族からお聞きました。私は入院時に頂いた「ばらになったのぞみちゃん」のことを急に思い出し、作品を再読し私がこの、「のぞみちゃんストーリー」の最後の“伝道者”になってしまったことを悟りました。どうか、このままこの作品を受け取ったままにすべきか、或いは世の中の皆さん方に知らせるべきか悩んだ後、渡辺さんのご家族と相談の上、「ばらになったのぞみちゃん（英語版）」の承認を頂いた上で、取り敢えず再発行（2,000部）することに致しました。足元の世界情勢は、丁度ウクライナとロシアの戦争が勃発し、多くの人たちが苦しみ、怪我をする、或いはご家族や友人を亡くされるといふ厳しい情勢にあり、この作品を通じた生前の渡辺さんの平和への思いは、ますます世の中に必要なものとなっていました。

3. 作品「ばらになったのぞみちゃん」が出来上がった経緯

ここで少し、この作品ができた経緯と、人々のつながりについて説明します。

渡辺さんに聞いた話ですが、この話に出て来る伯父さんの、Dr.Tohoru Francis ONODERA 先生は、渡辺さんのバウ育成の先生でした。最初 Dr.Tohoru Francis ONODERA 先生は、ご自分の姪であった「のぞみちゃん」のことは、多くを語らなかつたそうです。ONODERA 先生にしてみれば、姪とのあのような形での再会は、身を切られる以上に辛い思い出だったのでしようと、渡辺さんは述懐されていました。こうした事情から、渡辺さんは、Dr.ONODERA 先生にバウの育成方法をな習いながら、少しずつ時間をかけ、主人公「のぞみちゃん」の生きた運命、どうやって遥か遠い中国から一人で品川まで戻ってきたかという経緯を、聞き出されそうです。それを英語と日本語の絵本にまとめられたのが、本作品です。

4. 「のぞみちゃん」と“Dr.Tohoru Francis ONODERA 先生の息子さん”との出会いは「のぞみちゃん」が導いてくれた

この話は、更に続きました。一冊だけ手元に残った「ばらになったのぞみちゃん」を、私のクリスチャンの友人 H 君にみせたところ、友人は所属基督教教会の会員の信者さんに「ばらになったのぞみちゃん」の話を紹介してくれました。

そうする中、まったく偶然にもある信者の方が、「Dr.ONODERA 先生とは、東松山聖ルカ教会の小野寺 達先生のお父様ではないでしょうか？」、と問い出されたのです。

これを頼りにして、私は、Dr.ONODERA 先生の息子さんで、日本聖公会の司祭として勤めてらした小野寺 達先生をご紹介頂き、渡辺さんの作品、「ばらになったのぞみちゃん」、の絵本のことを話しました。小野寺先生は、たいそう驚かれ、又喜ばれ、「この作品に出て来る Dr.Tohoru Francis ONODERA は確かに私の父です。のぞみは父の姪です。」、ということが明らかになり、この偶然の重なるの出来事で、ついに「ばらになったのぞみちゃん」、のぞみちゃんの伯父さんの息子さんである、小野寺 達先生の手元に届きました。

5. Dr. ONODERA は科学者であり、又、稀代のバラの花の育成者であり、平和を愛していた人だった
小野寺 達先生との出会いにより、私は、お父様の Dr.ONODERA 先生が書き遺されていたという教会の手記を頂きました。その手記とは、東松山聖ルカ教会教会報（2021 年 8 月号）に紹介されたコラムで、小野寺 達先生が書かれた、父と、「のぞみちゃん」の思い出のことでした。それをここで原文のままご紹介します。

小野寺 達（司祭 ヨハネ 日本聖公会北関東教区東松山聖ルカ教会通信 マラナ・タ 2021 年 8 月号）
わたしの父親はアマチュアの域を超えるアマチュアのバラ愛好家で、いくつか新種のバラを作出しました。そのバラのひとつは「のぞみ」と命名されており、野バラのような一重の桜草ほどの花を咲かせます。この「のぞみ」という名に込められた亡父の平和への思いと、極めて個人的なことの中にある普遍的な平和への思い共有して戴きたく、ここにその文章を転記致します。

《バラになった少女》

小野寺 透

私と仲の良かった妹が、牧師と結婚して教会の事業にたずさわること半年で、その牧師は知る人ぞ知る南方の激戦地ガダルカナルへ出征した。その時生まれてくる子供に“のぞみ”と名づけて行った。彼は周囲の兵隊たちと同じく殆ど死んだと同様に倒れていた。その時耳元でアメリカ兵がガヤガヤ話していた。やがて彼は、そのアメリカ兵達の話にアメリカ英語で返事をしました。それは彼が牧師に必要な神学の勉強に、数年間アメリカ留学していたからであった。

彼の返事を聞いて驚いたのはアメリカ兵であったが、それが縁で彼は通訳の仕事を受け持ち、結局無事帰国することになった。出征時に名付けた“のぞみ”は女の子であって、父親の実家があった満州に渡った。渡った当時(昭和 18 年頃)の満州は平和であったが、終戦後、例のソ連軍の侵入で、女ばかりの一家の生活は苦しくなり、先ず祖母が亡くなり、次いで母も亡くなり次々に家族が死亡し “のぞみ”は一人ぼっちになって、近隣の教会関係の人々に助けられ暮らしていた。

やがて帰国の順番が来て、三歳の“のぞみ”は一人で帰国列車に乗り、はるばる長い汽車の旅を続けて、日本に着き、やっと明日は東京に着く予定が、列車の編成の都合で一日延びた。この延びた一日が幼い女の子に限りない悲劇となったのである。それは、この延びた日の東京品川に着く二時間前に、長旅の疲れか“のぞみ”は列車の中で息を引きとってしまったのである。

一方父親は品川駅に、生まれてはじめてのわが子を迎えに行き、未だ温もりの残っている我が子“のぞみ”を抱いたのである。この様にして父親は“のぞみ”の持ってきた二つの遺骨箱と一緒に浦和の家に帰ってきて、狭い我が家は一度に三つの葬式をすることになった。

バラを記事にした世界中の本にも載っているし、有名なプロフェッショナルのバラ作りの集會に、アマチュアの私が唯一人招かれたりしている。“のぞみ”が埼玉の浦和生まれであることを思うと、無常の感慨に打たれるのである。

ちなみにこの“のぞみ”と名付けられたバラは、英国王立園芸協会の「アワード・オブ・ガーデン・メリット」を受賞した初の日本人作出花です。私の父親が書いたこの文章の載った冊子の発行年月を調べる余裕もありませんが、この文章はおそらく 1970 年代に、父親が埼玉バラ会の会報に寄稿したものです。



私の父親も召集され兵役を強いられました。帰還できたおかげで、私は戦後ちょうど 5 年経った 8 月 15 日に生まれ、生かされて、更に 3 人の男児の父親になりました。しかし私と同じように、それぞれの命を生き延びてきたはずであった多くの人々が、戦争によって尊い命の繋がりを断ち切られてしまいました。私の従姉妹になるはずであったのぞみちゃんもその母親である私の叔母純子(今井 献司祭夫人)も、直接被爆したのではないにしても、戦争によって命を奪われました。そのように多くの人の生命を奪ってまで他国と交戦する根源には何があり、誰がいて、どうすることを目指しているのでしょうか。

平和に生きることは、神の御心を求めて生きることや他者を愛することと深くつながっています。私はまだ信仰を自覚する前に洗礼を受けた者ですが、イエス・キリストの愛と赦しの中に生かされ、その愛に基づいて平和を希求する人々と共に生きていきたいと思います。「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」(マタイ 5:9)

6. 人々のところに生き続ける、“のぞみちゃん”は、平和を愛する名もない人たちの平和の象徴。「ばらになつたのぞみちゃん」は、人が人を愛する心を忘れない、ということを我々に教えてくれる

まるで映画のようなこの実話ですが、わずか 3 歳に満たない小さな女の子が、自分を愛してくれるはずだった母さま、おばあさまを異国で亡くした上に、ただ一人で帰国する姿を想像すると、どんなに辛かっただろうか、幼い心がどんなに傷ついたかを想像するだけで、私たちの心はキュンと詰まります。のぞみちゃんも、もう少しで父さんに会えるところまで来ていたのに、それが叶わなかったという悲劇。

偶然にも、私は渡辺さんと入院先の病院で友人になり、主人公のぞみちゃんとそのおじさま、そしてその息子さん、色々な方々の人生に触れることが出来ました。

又、昨年夏、「ばらになつたのぞみちゃん (英語版)」を取り敢えず 2000 部印刷し、再発行したのですが、さあ、いったい誰にどういふうにこの話を伝えるかということで頭を悩ましていた時、結婚した次女から、「パパ、マ

マ、私子供が出来たよ」という報告を受けました。勿論私共は家族中でその事実をととても喜んだのですが、何故か私は、この時次女の授かった新しい命が、「のぞみちゃん」と重なって見えるのです。

2023年2月27日、この世に生を受けたのは女の子。この子は今、私たちの手の中で、すくすくと育ちつつあります。丸でのぞみちゃんの人生も一緒に生きているかのように逞しく自分の命を毎日生きています。



この偶然の重なり、関わる人々との数奇な運命、人と人との偶然のつながり、愛の心の大切さ、死と生まれて来る命の尊さ、私はこうした一連の出来事に出会い、深く感じ入り、今度は日本語版の作品を再発行し、皆様に読んでいただきたいと思った次第です。人と人とは、実はどこかで見えない糸でつながっている、私はクリスチャンではありませんが、明らかに何か神様の手が働いているように感じています。自分が何故こうして生きて、渡辺さんと知り合い、のぞみちゃんとの縁を得ながら、孫娘を抱き上げることができるのか、果たして神は私に何をさせようとしているのか、降り注ぐ美しい冬の朝日を見ながらこれは全て神の慈悲によるものではないのかと思うのです。

実は私自身、本年9月急性の心筋梗塞を発症、病院で命を救われました。一度心停止が起り、危なかったのですが助かりました。もしかしたら、「のぞみちゃん」が私の命を救ってくれたのかとも思います。「おじちゃん、まだおじちゃんは、この世でやることあるよ、まだ死ぬわけにはいかないよ。」と、言われているのかも知れません。この疾病の経験に基づき、「ばらになったのぞみちゃん」の再発行を決意しました。今日出来ることは明日に残さない。生きているうちにこそ大事なことは実行する。これが人間の生きる意味かなとも思います。

“ばらになったのぞみちゃん”、のこを多くの人に知っていただくために、私はペンを取って戦うことにしました。私たちは、「のぞみちゃん」のような辛い思いを二度と幼子たちにさせてはいけません。私の、或いは私の娘がお世話になった慶應義塾大学の図書館には、次の言葉が書かれています。

ペンは剣よりも強し (Calamus Gladio Fortior)

戦争は反対。この「ばらになったのぞみちゃん」の作品により、亡くなられた多くの方の魂が、慰められますように。
2023年11月美しい冬の朝に寄せて今日も生きていることを神に感謝して 島田秀郎